

特集

境界の脱構築

— 「生物学的統制の時代」におけるキリスト教 —

金 承哲

1. クローン羊ドリーと境界をめぐる議論としての倫理

ロスリン研究所によって生まれた「クローン羊ドリー」（一九九七年）が引き起こした神学的・倫理的論争の要諦は、単にヒトクローンの是非をめぐる甲論乙駁の次元を遥かに超え、人間の自己についての理解に新たな問いを投げかけている。そうした問いかけには、人間の自己と他者の間の境界についての問いを始め、人間と自然の間の境界、さらには、人間と神の間の境界についての問いが含まれている。「倫理」（ethics）とはこうした「境界」（ethos）をめぐる議論であるということを考えてみると、遺伝子工学的試みが倫理的議論を伴うことは当然であろう。「エトス」とは、「習慣」、「態度」、「情調」などを意味するし、「住み慣れた場所や居住地」（an accustomed place or habitation）（Webster）、さらには、そうした人間の住める「居住地」とそれを超える未知のところとの「境界」をも含意するのである。

また、「エトス」は、「動物をその中に入れる密閉されたスペース、部屋、居場所」をも含意しているので、ひいてエトスとは、人と動物の境界線、さらには、野生動物と家畜の間の境界線をも意味する。「私たちは、倫理を成し遂げるとき聞いているのは、私たちが果たしてどこに属しているのかということである。すなわち、私たちは、私たちが適切な場所に位置付けるために努力しているのである」<sup>1</sup>。そうであれば、そもそも倫理とは、「宇宙における人間の位置」への自覚に直結していると同時に、そのような自覚の中には、自然そのままの野生の空間と人為的空間の間に境界を設定することが含まれる。

こういう意味において考えてみれば、人類の歴史を居住空間の確保と動物馴らしの歴史として把握したペーター・スローターダイクの論旨は、境界線引きとしての「エトス」の正鵠を射ているといわざるを得ない。スローターダイクは、ヒューマニズムの本質を動物的な面から人間的な面への飼育慣らしとして読み取り、遺伝子工学的試みを新たなヒューマニズムの登場として歓迎する<sup>2</sup>。要するに「エトス」から派生したものとしての倫理とは、人と自然の間の境界をめぐる議論に違いない。そして、人と動物の間の境界線設定の問題の根源は、人と動物を含むすべての存在の間の境界を定める神と人間との間の境界の問題にまでたどり着く。境界線がどこにあるか、境界線をどこで引くべきかという問題は、さらに、境界線とはすでに決められているのか、そうであれば、人間がそれを変更してもよいのかという問題に直結するのである。

また、「エトス」から派生したエチコス (ethikos) は「生活の理論」などを意味し、そこからさらに「倫理」と訳される「エチック」 (ethics) が由来する。こうした語源的事実に基づくならば、キリスト教倫理とは「神的領域と人間的領域の間に線を引くことによって、被造物としての責任の領域の境界を明示する」ものであると、その意味合いを幅広く設定することもできる。それどころか、そのような問題設定こそ、倫理そのものの本来の意味に相応しいことになる。そうであるならば、ヒトクローンをめぐる倫理的論争は、神と人間の間に、さらには神と人間と自然の間に引かれていると思われる「境界線」をめぐる議論として理解することができる。

## 2. 「打ち砕かれた自己」

遺伝子工学的試みは、たとえ「遺伝子決定論」という素朴な誤謬には陥らないとしても、人間のアイデンティティを人間の遺伝子的状態によって解き明かそうとすることによって、人間と他の生命体の間に連続性を強調している。(T・ペータースによると、「遺伝子決定論」には概ね「プロメテウスの決定論」と「傀儡的決定論」がある。) 人間の本質を握っていると判断される遺伝子の操作可能性は、人間のアイデンティティは「脱中心化する」 (de-centering) アイデンティティであり、人間の自己という認識は、遺伝子の進化の中で形成された偶然的なものであるということを明らかにする。遺伝子工学的観点からみると、人間の自己は「打ち砕かれた自己」 (the shattered self) にすぎない存在である。

アメリカのバイオ・インフォマティックス学者のP・バルディは、バイオテクノロジーの登場によって出現する人間性を「ポスト人間」 (posthuman) と名づけて、バイオテクノロジーが持つ可能性について積極的に擁護する。彼によると、バイオテクノロジーによって既存の「性」の概念に3段階の「打ち砕き」 (shattering) がもたらされた。その3段階とは、試験管ベビーを生み出した「体外受精」、「ヒトのクローニング」、そして、「DNAの操作」を指す。こうした一連の性観念の「打ち砕き」は、すでに現実の中で行われているものの、現社会はそれに対応できるほど成熟していないと、バルディは問題提起をする。その中でもっとも真剣に応えねばならないのは、やはりヒトクローンへの対応である。

実に私たちは、ヒトクローンについて何の準備もしていない。・・・あらゆる見方にもかかわらず、クローニングは私たちの精神を白紙状態にしてしまいそうである。それは、どこか私たちを非常に不安にさせる。このように、私たちが落ち着きをなくしているという事実こそ、クローニングというのが「私たちは何か」という観念に挑戦することに対して半ば意識的に自覚しているということをしめしている。・・・事実上、自己、生と死、知性、性などに関する私たちの概念は非常に原始的であり、それが人類の歴史というスケールで深刻に変化する寸前にある。<sup>3</sup>

バルディによれば、バイオテクノロジーの試みによって起こる最も顕著な変化は、人間

の自己意識における変化である。彼は、クローニングによって自己観念も「打ち砕かれ」、いわば「打ち砕かれた自己」(The shattered self)を生み出し、彼の予測によれば、「将来、技術工学の改良により、完全に自己が打ち砕かれるまでには数十年くらいしかかからない。」この「打ち砕かれた自己」への過程について、バルディはこう述べる。

数百万年の進化を通して、我々の脳は自己の内的感情を我々に提供するように備えられている。この感情は、我々一人一人が正確な境界によって定められている独特な個人である、ということである。我々は個々の人が特定の感情と思想を持っていると見なし、基本的には他者や動物、あるいは、コンピュータのような他の情報伝達システムとは異なると考える。また我々は、独特な方法によって自分を繁殖するようになっている。これらの概念は、我々自身に対して、そして我々が機能する方法にとって中心的なものであり、我々の教育や文化を通して強化されている。<sup>4</sup>

バルディが指摘するように、このような「自己中心的な世界観は問題があるし、科学的には間違った」ものである。我々がそのような認識を持っているのは、先験的に定められているからではなく、「進化による偶然的結果」にすぎない。

すなわち、人間の中心点と考えられたDNAは、人間の期待を裏切る形で自然の「中心点」としての人間という発想そのものを無化させるという、逆説的機能を果たすものである。DNAは、人間が他の生命体と親類の関係にあるということを暴露することによって、人間の自我の脱構築(the deconstruction of the self)をもたらすのである。

このように、DNAをめぐる生命工学的研究が進められることによって、今まで当然視されてきた人間の自己理解が問い直されている。人間の自己というものは、先験的に特定され区別されるものではなく、「他の無数の自己」とただ恣意的に区分されるだけなのである。「ゲノムと・・・精神(mind)は、むしろ流動的かつ連続的実在(entity)であり、個人としての我々は、この連続体の例(sample)にほかならない。・・・我々は、我々のクローンを作ることができるし、複数の脳を持つことができる。自己と他者、自己と世界、内面と外面の境界はあいまいになり始めていて、究極的には完全に消えてしまうであろう」<sup>5</sup>。

昨今の遺伝子工学が唱えるこうした人間理解は、宇宙の中心的存在としての人間を脱構築してきた近代以来の思想的流れの極めとして考えてもよいだろう。こうした思想の流れは、もちろん神を實在の中心から押し出そうとする試みと同時的に行なわれてきた。

### 3. 「神を演じる」

神による創造と、また、神による「創造の秩序」を實在理解の基本としているキリスト教世界においては、遺伝子工学が提起するこうした問題は極めて深刻に受けとめられている。すなわち、遺伝子工学に研究成果は、単なる科学的出来事としてではなく、「神学的問題」や「宗教的問題」として受け取られ、ついには「倫理的憤怒」を触発したという事

情によってわかる。米国のキリスト教神学者テッド・ピーターズがドリーの誕生について報告するとおりである。

全世界は、クローニングが成功したという事実が知らされたとき、ただちにそれが神学的問題であるということを直感した。それは科学以上の問題であり、単なる科学技術上の新しい発見ではなかったのである。『タイム』の表紙には、二匹の羊の写真に「もう一人のあなたは存在するのか」という見出しが添えられていたが、これは単なるジョーク以上の意味を持っていた。クローン羊ドリーは、宗教的問題を触発させたのである。私たちをとりまいている恐怖は、ついに倫理的憤怒を呼び起こしたのである。<sup>6</sup>

キリスト教においては、こうした「倫理的憤怒」は、「神を演じる」(Playing God)という観念を中心にしながら行なわれているが、そうした議論は極めて錯綜していると言わざるを得ない。「神を演じる」とは一般的には、人間が神の主権領域としての自然に介入したり、医者が患者の生殺与奪権を握ったりすることへの批判を指し示す概念であり、さらには、遺伝的増進のように人間の生命に深く関与することを阻止しようとする際に用いられる概念である。

「神を演じる」というフレーズが意味を持ち得る場合は、すべての存在者が神を頂点にするヒエラルキー構造の中に配置されており、それぞれの位置は造り主としての神によって定められているという世界観、すなわち、A・ラヴジョイが「存在の大いなる連鎖」(The Great Chain of Being)と名づけた「自然の梯子」(scala naturae)という観念によって表わされる。「存在の大いなる連鎖」においては、諸々の存在者がそれぞれの輪として表象されており、個々の輪は、自分に決められた位置を抜け出すこともできなければ、他の輪に変わることも不可能である。各輪は、神によって個別的に創造され決まった位置に秩序整然と置かれており、その位置を逸脱することは許されていない。この世界観によれば、神によって創造された一切の被造物——もちろん人間も含め——は、それぞれ不変の存在として決まった位置を維持しながら永遠に変わらない静的な秩序を保っている。ゆえに、神によって定められた位置を逸脱しようと試みる行為は、「神を演じる」行為として厳しく禁止されるべきである、ということになる。一言で言うならば、「神を演じる」とは、人間と神の間の「境界」を不敬に侵害しようとするものと判断される一切行為への警告として働くのである。

#### 4. 展望

遺伝子についての研究は、自己と他者、人間と自然、人間と神の間の境界を脱構築することによって、人間に新しい自己理解を求めている。キリスト教神学と倫理には、これらのことについて如何に応えることができるのかが問われているのである。<sup>\*</sup>

---

〈註〉

<sup>1</sup> Joseph M. Incandela, “Playing God: Divine Activity, Human Activity, and Christian Ethics” *Cross Currents* vol.46, No.1(spring,1996),fn.4.

<http://www.crosscurrents.org/Incandela.htm> (2006年11月19日)

<sup>2</sup> Peter Sloterdijke, *Regeln für den Menschenpark: Ein Antwortschreiben zu Heideggers Brief über den Humanismus* Suhrkamp, 1999 (仲正昌樹訳) 『「人間園」の規則—ハイデッガーの「ヒューマニズム書簡」に対する返書』御茶の水書房、2000年。

<sup>3</sup> Pierre Baldi, *The Shattered Self. The End of Naural Evolution* The MIT Press, 2001, p.3.

<sup>4</sup> *ibid.*, p.3.

<sup>5</sup> *ibid.*, p.4.

<sup>6</sup> Ted Peters. “Cloning Shock: A Theological Reaction” ed., by Ronald Cole-Turner, *Human Cloning. Religious Responses* Westminster John Knox Press, 1997, p.12. (傍点は引用者による。)

＊ 本稿の内容については、拙著『神と遺伝子——遺伝子工学時代におけるキリスト教』（教文館、2009年）を参照すること。

Seung Chul KIM (金城学院大学人間科学部・教授)

